毎日新聞×SDGs

ジェーン・スーさんに聞く「ジェンダー」

当事者主役の視点を

ジェンダーについて語るジェーン・スーさん＝東京都港区で14日、梅村直承撮影

ジェーン・スー　1973年、東京生まれ東京育ちの日本人。作詞家、コラムニスト、ラジオパーソナリティー。「貴様いつまで女子でいるつもりだ問題」（幻冬舎文庫）で第31回講談社エッセイ賞を受賞。近著に、自分を慈しむセルフケア・エッセー48編を収録した「おつかれ、今日の私。」（マガジンハウス）。

「ジェンダー平等」は、SDGs（持続可能な開発目標）が掲げるゴールの一つだ。作詞家、コラムニスト、ラジオパーソナリティーとして活躍するジェーン・スーさんに、「日本のジェンダー」について聞いた。【聞き手・猪狩淳一】

――男女共同参画社会やジェンダー平等をテーマに講演されています。

◆たくさんの人の前で講演をするのは得意ではないんですが、私が話をすることで、女性が元気になったり、参加した男性がはっと何かに気づいたりするのであれば、その役に立てることはやろうという感じです。

――講演ではどういうお話をされていますか。

◆性役割というものが厳然とある社会で生きている中で、顔の見えない世間というものが決めたものに従っていると、女性の場合、なかなか自己決定権が持てなかったり、サポートをする能力が突出して伸びてしまったりという側面があります。それが望んでいることであれば、「自分らしく生きられる」ということでいいと思うんですけれど、そうじゃなくて性別によって期待される役割というものに対して、自分が応えてきたことの結果なのではないか、という疑問をまず持ってもらうために話しています。

――ジェンダーについて若い頃から考えてきたのですか。

◆私自身、30代になるまでの会社員時代には、性役割であるとか、性差別ということには無頓着だったと思います。"女だから"というよく分からない定義を自分自身にして、それでやりたいこと、できることの範囲を狭めてきたんだろうなと、後から振り返って分かりました。

――疑問に思ったきっかけは？

◆一番は結婚制度ですね。20代後半ぐらいから結婚を自然に考えるようになる社会で、特に女性の場合、妊娠・出産を考えると、どうしても年齢のリミットがあって、ずっとそっちに行けないんだろうなと思った。当時は珍しかったんですが、自分の名前が変わることにものすごく抵抗があった。名前が変わるのは女性だから、手続きとか面倒くさいのよねって思って、結婚制度って何だろう、どうして私ここにピタッと行かないんだろうって、性役割ということについて、自分自身でぶち当たった最初だと思います。

――夫婦別姓については20年以上進んでいませんね。

◆夫婦別姓ができたら結婚していたかもしれません。少なくとも結婚の確率は上がったと思います。自分の名字をないものにするとか、センチメンタルな部分もあるんですけど、制度としてなぜ自分の名字っていうのが変わって、女性ばっかり大変なことがあるということに対する疑問がなければ、もしかしたら結婚していたかもしれません。あとどうしても「家」というものを意識しますよね。姓が同じになるって、妻だったり、嫁だったりっていう新しい「タグ」が自分につくことに対する恐怖はありました。まだ自分自身が確立していなかったっていうのも大きな理由の一つだと思いますが、外国人の友達は、別姓だったり、二つ目の姓を持ったりっていうのを自然に選択できているのを見ると、何でできないんだろうっていう疑問はありました。

――なぜ進まないと思いますか？

◆誰かちゃんと説明してほしいですよね。法律を変えるっていうことは国会で承認を得なければいけないっていうことで、ということはそれに賛成する人数が一定数を満たさなくちゃいけないわけで、政治と密接に関係しているんですよね。

――男女平等だけでなく、LGBTQ＋など性的マイノリティーの差別も問題になっています。

◆性別というものの考え方とか、とらえ方が今まで思っていたのとは違ってきたということを起点にすれば、必然的に性的マイノリティーの人たちの権利だったり、環境だったりを同時に考えなくちゃいけないと思います。個人の心の問題ではなく、法律で差別発言や権利侵害をすれば罰することで守っていくべきだと思う。人の心自体は更新していかなくちゃいけないと思いますが、結局法整備の問題で、最終的には「選挙に行こう」になっちゃうんですけどね。

――ジェンダーギャップ調査では、日本の女性議員数や管理職の比率は世界的にも低く、スーさんも以前から、議会の男女間格差を是正するために両性の比率を割り当てる「クオータ制度」に賛成だと言っていましたね。

◆やはり分母で結果は大きく変わるのは、さまざまなところに表れていると思います。グラミー賞やアカデミー賞などの世界的なエンターテインメントの賞も、投票する会員の数と構成を変えている。今まで偏りがあったので、結果にも偏りが出てくる。分母の構成を変えるっていうのは喫緊で解決しなくちゃいけない課題になっていると思います。

新しい価値観に触れて

――時代の変化に対応するにはどうしたらいいですか。

◆自分をアップデートしていかないと、どんどん生きづらくなるでしょう。そのためには新しいものに触れていくといいと思う。最新の価値観は最新のテクノロジーに宿るので、講演などでは、「とにかく（動画配信サービスの）Netflixに入れ」って言っています。NetflixだけでなくHuluでもアマゾンプライムでも、何でもいいんですけど、地上波では流れない新しい価値観の物語があって、それを見ることで意識が変わるのは間違いなくあると思います。

――おすすめのコンテンツはありますか。

◆フランスのNetflixが作った「軽い男じゃないのよ」というラブコメディーですね。いつも女性に軽口をたたいている浮気性の男が、女の人に見とれていたら、電柱に頭をぶつけて、目が覚めたら、男女が完全に逆の異世界に行ってしまいます。そこでは町の広告が半裸の男性ばかりだったり、公園でたたずんでいるといろいろな女性から声をかけられたりするんです。会社に行くと、男女の比率が逆転していて、以前部下だった女性が上司になっていて、男性が「今日は女の人が多いね」ってうれしそうに声をかけると、「これでも頑張っているんだ」って言われるんです。「男が少ない」という批判だととらえられたわけですが、「善処する」と言って何もしないのは、元の世界を反転させたものでもあるわけです。すべての場面で男女の役割が反転していて、社会に性差別があることが分かります。ラブコメのつもりで見ていると、完全にホラーなんですよ。「男女差別なんかない」って思う人は、一回それを見てもらえばいいと思います。

――男性には気がつきにくい性差別がありますね。

◆差別というと口汚くののしったり、意図的に仲間外れにしたり、就ける職種を限定したりという行為を想起すると思うんですけど、自分と同じ"いち人間"として相手を尊重しないのが差別の根っこにあると思います。例えば、男性に1人暮らしでマンションを借りるときに何をチェックするか聞くと、バス・トイレ別かとか、クーラー付きかだとか、駅から徒歩何分かとかですけど、女性なら2階以上がマストなんです。泥棒に入られたり、のぞかれたりするので1階は選べない。構造として女性の方が社会的に不利な場面というのが多いんです。

――特に許せないと思うことは？

◆個人的には、女子学生を優先してゼミに採用するというハラスメントがまかり通っていた大学や、入試で女性受験者を減点していた医大のように、学生が性別によって扱いが不平等になることには、若者に希望をつないでいかなくちゃいけないのに、大人がすることではない、と本当に腹が立ちますね。

――近年、SDGsが注目されています。

◆企業が二酸化炭素の排出量を公表したり、貧困に対して、どんな取り組みをしているかを発表したりして、消費者が見られるようになったのは大きな進歩だと思います。ただ、さまざまな社会課題を全部一緒にしているように感じるので、もう少し丁寧に扱った方がいいでしょう。一番気をつけなくちゃいけないのは、当事者不在にならないことですね。環境や貧困、食料、性差別など、それぞれの問題はつながっているので、その当事者から「こういう形で解消したいんだ」という声を聞いたうえで、それぞれの課題を考えていくべきだと思います。

ラジオ番組に臨むジェーン・スーさん

TBSラジオ「ジェーン・スー　生活は踊る」のロゴ

<スーさん出演番組>

【TBSラジオ】
「ジェーン・スー　生活は踊る」（月～木曜日午前11時～午後1時生放送）
日々の家事、育児、介護、仕事に学校、病気療養中…皆様の生活をちょっと彩る生活情報を発信。

【TBS Podcast】
「ジェーン・スーと堀井美香の『OVER THE SUN』」
2020年10月に配信開始した、スーさんとフリーアナウンサーの堀井美香さんが、リスナーとともに語らう、TBSラジオが制作するPodcast番組。毎週金曜日の夕方5時配信。

「となりの雑談」
2023年2月に配信を開始した、スーさんと、雑談の人、桜林直子さん（通称・サクちゃん）がテーマを決めずに雑談しまくる番組。毎週火曜日配信。

毎日新聞×SDGs

SDGsとは
SDGsは「Sustainable Development Goals」の略称。国連が2015年、全会一致で採択した「持続可能な開発のための2030アジェンダ（行動計画）」に盛り込まれた国際目標で、「誰一人取り残さない」（No one will be left behind）を合言葉に、30年までの達成を目標に掲げる。
「すべての人に健康と福祉を」「気候変動に具体的な対策を」など17の大きなゴール（目標）と、それぞれのゴールを達成するための計169のターゲットを盛り込んでいる。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

きょう創刊151年

「人間ひとりひとりの尊厳とふれあいを重んじます。生命をはぐくむ地球を大切にします。生き生きした活動を通じて時代の創造に貢献します」。これは毎日新聞社が1991年に掲げた企業理念であり、国連のSDGs（持続可能な開発目標）と響き合う内容になっています。毎日新聞はきょう21日で創刊151年。オンライントークイベント「毎日共生会議」の開催など日々の紙面や各種事業を通じ、多様性・包摂性のある社会の実現を目指します。

一人一人が輝く社会

楽しく生き生き 健康長寿

世界最速級で高齢化が進むニッポン。高齢者のフレイル（心身の働きが弱くなる状態）化が懸念されるほか、2025年には「65歳以上の5人に1人が認知症になる」との推計もある。健康寿命延伸に向けた取り組みは待ったなしとなっている。

政府は19年に「認知症施策推進大綱」を閣議決定し、初めて認知症「予防」を打ち出した。まだ発症自体を防ぐ「1次予防」はできないものの、発症を遅らせる「2次予防」、症状の進行を遅らせる「3次予防」は可能になってきたからだ。

毎日新聞社は33年前の90年、「公益財団法人　認知症予防財団」の前身、「ぼけ予防協会」を設立した。認知症という言葉はまだなく、症状がある人への偏見も今よりずっと強かったころだ。こうした課題に毎日新聞はいち早く向き合い、シニアに寄り添うさまざまな事業に取り組み始めた。

現在、その中心となっているのが「たのシニア」と銘打った中高年向けの各種事業だ。18年に考案した「思い出ノート」は、昔の記憶をたどる認知症療法「回想法」を取り入れたワークブック。100の質問に答えていくうち自然と自分史ができあがる。近年、回想法は認知症予防にもつながると期待されており、毎日新聞は全国各地で「書き方講座」を開催している。

このほか年間200回以上開いている「昭和歌謡コンサート」（主催マイソング）に携わり、高齢者の外出機会創出を後押ししている。読者を中心としたセカンドライフに関する無料相談窓口の開設などを通じ、健康長寿社会づくりに貢献している。【吉田啓志】

毎日新聞が後援する「昭和歌謡コンサート」＝マイソング提供

「共生」実現へ意見交わし

分断が進んでいるとされる社会を、毎日新聞のジャーナリズム姿勢によってつないでいく。「社会をつなぐ、言葉でつむぐ」。創刊から150年を超えても、それが毎日新聞の使命であることを表現したキャッチフレーズだ。

目指しているのは共生社会の実現。オンライントークイベント「毎日共生会議」は、報道と並ぶ取り組みの一つとして、昨年4月に始まった。評論家の荻上チキさんが司会を務め、さまざまなテーマについて有識者を招き、共生社会のあり方や実現に向けた課題などについて意見を交わしている。

昨年4月の1回目のテーマはLGBTQ。タレントのパービーさんやトランスジェンダーであることを公表している東京都世田谷区議の上川あやさんが参加し、毎日新聞の記者もこれまでの報道を解説した。上川さんはLGBTQなどのカップルを婚姻相当とみなすパートナーシップ制度が「200以上の自治体に広がっている」と述べ、パービーさんもジェンダー問題などで「セリフ一つにも注意しながら編集したり、台本を書いたりする人が増えている」とテレビ業界の変化を語った。荻上さんは「さまざまな当事者がいるということを、政治や社会が発見しつつある」と現状を指摘した。

2回目は乳がんをテーマに10月に開催。乳がんの経験を持つ芸人のだいたひかるさん、国立がん研究センター東病院でがん専門相談員を務める坂本はと恵さんが参加した。だいたさんは「乳がんになっても私のように妊娠、出産できることを知ってほしい」と話し、坂本さんは「がん治療の副作用を周囲に理解してもらいながら仕事を調整することが課題になっている」と述べた。記者が欧米に比べ検診率が低いことを紹介すると、荻上さんは「医療や保険が充実しているのに、なぜ検診につながりにくいのか。幅広い制度設計が必要だ」と問題点を語った。

今年2月9日には生物多様性をテーマに3回目が開かれ、保全生態学者で国立環境研究所室長の五箇公一さんが参加。五箇さんは「生物多様性は、人間が豊かで安全な生活を送るための環境基盤だ」と述べ、自然破壊によって人間社会に新しい感染症の病原体が持ち込まれるリスクも高まることを解説。「気候変動や感染症リスクが続けば、人間社会は持続性を失う」と警鐘を鳴らした。約100万種の動植物が絶滅の危機に直面している現状を記者が報告し、荻上さんは「日本に限らず世界で経済が優先され、生物多様性の問題は後回しにされがちだ」と課題を指摘した。

4回目は障害者スポーツをテーマに3月下旬に実施する予定で、来年度以降もその時々の話題などをテーマに選んで開催する。毎日新聞は共生社会の実現を目指して特集面「ともに面」を毎月掲載しているほか、5人の有識者と主筆で構成する「毎日ユニバーサル委員会」を設けて報道への提言をもらうなどの取り組みも続けている。【桐野耕一】

1回目の「毎日共生会議」に臨む（左から）荻上チキさん、パービーさん、上川あやさん、藤沢美由紀記者＝東京都港区で2022年4月、竹内紀臣撮影

＃地球の未来をデザイン

世界では、熱波や大雨、干ばつなどの異常気象が頻発し、人間を含む地球上の生物の命を脅かしている。地球温暖化を防ぎ、私たちが50年、100年先も地球上で安全に暮らしていくために今、さまざまな企業や団体が先進的な研究・開発に取り組んでいる。

毎日新聞社が2022年4月から開講している「＃地球塾2050」は、未来の社会を担う中学・高校生がこうした取り組みを学ぶことで、地球の未来をデザインする力を育んでもらうことを目的にしている。

次世代エネルギー、水再生プラント、高層都市、気象情報など、地球塾の講義のテーマは多岐にわたる。企業・団体の担当者が解説する新しい取り組みに触れた生徒たちは、新たな視点から自分の考えやアイデアをまとめ、特集記事としてウェブ上で発表する。

初回は「宇宙視点から地球環境の未来を革新させる技術創出」を掲げるNTT宇宙環境エネルギー研究所の取り組みを生徒たちは学んだ。光と電子の技術の融合で劇的に消費電力を削減する発明▽地球全体をカバーして宇宙までぐるりとつながるネットワークの構築▽宇宙空間での太陽光発電――。SFの世界の話ではない。限界を打破するイノベーションによって、地球が抱える課題は解決できるという近未来像が示された。生徒からは「常識にとらわれない発想に驚いた」「未来は自分たちでつくっていくのだと意識した」と感想が寄せられた。

地球塾を通して、子どもたちが地球と共存する意識を高めていくことを願っている。【宮島友香】

地球塾の講義に参加し、ディスカッションする生徒たち＝東京都千代田区で2022年4月、松田嘉徳撮影

＃地球塾2050のサイトはこちら▼